

❖ LCC News Letter 1 8

同志社校友会大阪支部産官学部会 20 June 2011

新島と明治維新の雄藩「薩長土肥」

去る3月28日(月)のLCC3月定例会に神学部の本井康博教授を約一年ぶりにお招きし、「大阪と新島」の話題を中心に数々のお話を伺いました。特に同教授の歴史観に基づく「薩長土肥」の同志社に対する貢献度比較を皆様と共に興味深く拝聴しました。

本井教授によれば、同志社に一番貢献したと思われる藩は、木戸孝允に代表される長州藩、続いて土佐藩、肥前佐賀藩、そして、残念ながら薩摩藩が最後の順番だそうです。その裏付けとなる背景の一部が、同志社時報、本井教授の著書「新島襄の交遊」、徳富蘇峰著「木戸松菊先生」や同志社大学編「新島襄の手紙」などから読み取れます。

先ず、木戸孝允を中心とする長州に関しての記述は次の通りです。

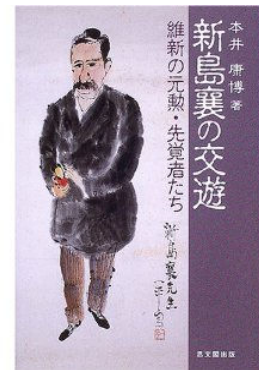
明治八年、「官許同志社英学校」は、榎村正直(長州出身)が京都府知事の任期中に認可されますが、この榎村を幕末時代から政務の連絡役として重用していたのが木戸孝允です。(同志社時報 No 131、p80)

また、榎村の右腕といわれた京都府大書記官、尾越蕃輔や国重正文も同じ長州出身で、共に木戸の配下であったことが新島に幸いでした。

要するに京都府庁では長州藩が圧倒的な地位を占めている点に木戸の発言力の巨大さが窺われ、木戸を知己とする新島にとって京都を学校設立の場所に選んだことは実に幸運でありました。(新島襄の交遊—本井康博著 P.56~57)

木戸公なかりせば、同志社は出来なかったとは申しませぬが、新島先生をしてこれを成さしめたのは、木戸公の力です。(木戸松菊先生—徳富蘇峰著 p.43)

加えて、「木戸孝允日記」にも「今日、新島に始めて面会す。同人は七八年前学業に志し脱至此国当時己に大学を經此度文部の事にも着実に尽力せり可頼の一友なり」との記載が読み取られます。(新島襄の交遊 p.87)



また、土佐藩の大隈重信、肥前佐賀藩出身の板垣退助については、それぞれ下記のような記載があります。本井教授の同志社に対する各雄藩の貢献度ランキングを立証するには、これだけでは、全く不十分ですが皆様のご参考に供します。

大隈重信は東京専門学校(現早稲田大学)を立ち上げたばかりで、財政的には余裕があったわけではないが、井上馨と共に新島の大学設立募金にも側面から支援を惜しまなかった。また、明治二十一年七月十七日に新島のために、大隈外務大臣邸で募金集会を開催し、渋沢栄一や岩崎弥之助、大倉喜八郎、原六郎ら財界の有力者から、一晚で三万一千円の予約がなされた。なお、この集会の直前、大隈も井上も京都に足を運び、同志社の現況を視察している。(新島襄の手紙—同志社編 p.242)

一方、板垣退助については、一八八二年、自由民権論の全盛時代に時の総理、板垣退助は、岐阜で遊説中の四月六日、刺客に傷つけられた。新島は彼の遭難に深く同情して二、三回見舞っている。その後板垣は欧州に外遊し、一八八三年六月に帰国した。新島が冬休みを利用して琵琶湖湖畔へ狩猟に行った際、目が冴えて眠れないまま起き出し板垣宛に「新心」を抱いた「新民」となられるよう、それには、キリスト教によるしかないことを、熱誠をこめて手紙を書いている。(新島襄の手紙—同志社編 p.181)

限られた紙面では、木戸孝允を中心の長州藩、大隈重信の土佐藩、板垣退助の肥前佐賀藩が、それぞれ新島襄及び同志社に、いかに協力したかの度合いを測るには、とても難しいですが、少なくとも友好的であったことは感じます。

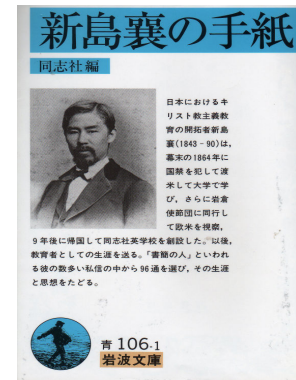
特に、繰り返しになりますが、徳富蘇峰が自身の著書で木戸公なかりせば、同志社は出来なかったとは申しませぬが、新島先生をしてこれを成さしめたのは、木戸公の力があります(木戸松菊先生—徳富蘇峰著 p.43)とまで言っています。従って、長州藩の同志社に対する協力は土佐藩、肥前佐賀藩に比べ突出していたのでしょう。

しかし、私が本井教授のご意見と異にするのは、薩摩藩の同志社に対する評価です。結果的に薩摩藩が一位です。

森有礼は、新島のアンドーヴァー神学校在籍の頃、日本政府初代駐米公使としてワシントンに派遣された。一八七一年三月十五日、新島はボストンで初めて森に会い、互いに肝胆相照らすところがあった。森は留学生の管轄を職務の一つとしていた上に、同じ薩摩出身の学生がモンソン・アカデミーに数名留学していたので、新島に関する情報は相当把握していた筈である。

新島は初対面にも拘わらず、森から岩倉使節団への協力要請を受けたが、しかし、日本政府としては、国禁を犯した犯罪者を雇用するわけにはいかなかった。(本井康博著—新島襄と建学精神・同志社科目テキスト p.49)

森は新島の帰国の請願を政府に取り次ぎ、パスポート取得に力を貸した。かくして、新島は最早、日本人に会うことを避けなくてすむようになったのである。



新島襄の手紙

一八七二年に岩倉使節団をワシントンに迎えたとき森は新島に文部理事田中不二麿の通訳兼案内役を務めるよう要請し、新島はその要請に立派に答えてきた。

(新島襄の手紙—p.138)

新島の人生前半で特筆すべきは、岩倉使節団との邂逅、思いがけない出会いです。1871年森有礼から使節団に協力を要請されたことが契機となり、森の斡旋で日本政府から正式に留学許可書とパスポートが発行されました。

この時点から鎖国を冒した「犯罪者」が一転、晴れて「自由な日本市民」になれたのです。新島にとり、ひいては同志社の歴史にとり、最大のターニングポイントであり、これに深く関与したのが、薩摩出身の森有礼であり、新島の情報提供に協力したのが薩摩の留学生だったのです。

(文責：北出 至)